

2019年12月13日（金）

## ないじえる芸術共創ラボ 古典インタプリタ日誌 梁亜旋さん・松平莉奈さん 共同WS デジタルアーカイブ活用のこれから

### 1, ついに実現、新DBについてのワークショップ

国文学研究資料館では、複数の機関が所蔵する古典籍の情報や、その高精細画像を一度に検索できるポータルサイトである「新日本古典籍総合データベース（=新DB）」<sup>1</sup>を構築・公開しています。

このデータベースのすごいところは、古典籍の書名が分からなくても、「犬」「猫」のようなキーワードで、関連画像が検索できてしまうところです。そして国文研が所蔵している資料の写真是もちろん、連携しているさまざまな機関に所蔵されている資料もアーカイブされているので、家に居ながらにして、大量の資料を一気に閲覧することができるというすぐれもの。ちなみに国文研蔵の資料の画像は、クレジットをつけていただければ、自由にダウンロード・利用していただけます！（※利用条件については必ずご確認ください<sup>2</sup>）

実はこのプロジェクトに参加する前から、新DBを利用しておられたという松平さん。もっと有効活用したい！という想いを知り、近世後期～明治初期の文芸がご専門で、新DBを作成するプロジェ

クトに深く関わっていらっしゃる山本和明先生（当館教授）に、レクチャーをお願いしました。

今回は入口敦志先生と、中世仏教と文学がご専門のダヴァン ディエ先生（当館准教授）も、新たにワークショップへ加わってくださいました。



<sup>1</sup> <https://kotenseki.nijl.ac.jp/>

<sup>2</sup> <https://kotenseki.nijl.ac.jp/page/usage.html?ln=ja>

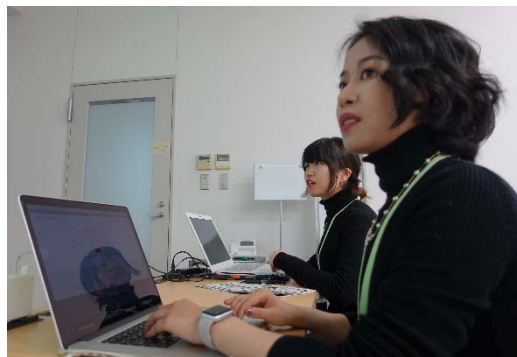
2019年12月13日（金）

## 2, デジタルヒューマニティーズの時代

近年、さまざまな情報がデジタルアーカイブ化され、大量の資料を、WEBを通じて閲覧できるような環境が整いつつあります。WEB環境が研究手法を変える時代がやって来たのです。

人文学（歴史学、哲学、文学、宗教学など）の分野で、デジタル技術を活用して、自身の学術活動に新しい技術や仕組みを採り入れて行う学問を、デジタルヒューマニティーズ（DH）と呼ぶそうです。多分野を横断しながら、自分の専門分野について考えてゆく時代なのですね。

ないじえる芸術共創ラボでも、デジタルを介して新たな発想が生まれれば、それはデジタルヒューマニティーズなのです、という山本先生のお言葉にハッとしました。



だからこそ、WEB上のアーカイブの特徴を良く理解して、自在に使いこなせる技術と知恵が必要ですし、自由に使えてしまうからこそ、クレジットの確認が必要なのです。

このワークショップでは、山本先生に、国文研の新DBを中心に、国内外のさまざまなデータベースについてご紹介いただきました。



特に印象的だったのは、新DBの画面を有効活用する方法です。

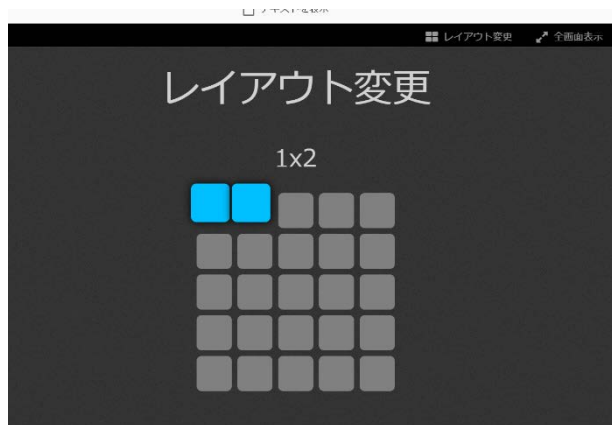
たとえば、曲亭馬琴の有名な読本『南総里見八犬伝』は印刷物ですが、多くの諸本がのこされており（新DBで検索すると73件もヒットします）、印刷とはいえ、刷りの状態、板のバージョン、書入れの有無など、それぞれに違いがあります。そのなかから一番良い本を見付け出したり、同じバージョンの本がいくつあるのかを数えたりするには、全国各地の大学図書館や文庫、あるいは海外の図書館に

2019年12月13日（金）

収められている諸本を見て回り、詳細に比較しなければなりません。

そこで役に立つのが新DBなのだそうです。

DBの画面右上には「レイアウト変更」というボタンがあり、そこから画面を何分割にするのかを選べるようになっています。左右にビューアーを設けて、それぞれに違う画像を入ると、なんと違うバージョンの『八犬伝』を、自宅に居ながらにして比較できてしまうのです！（※詳細は、利用マニュアルをご覧ください<sup>3</sup>）



同じ書名のさまざまなバージョンを調査することを諸本調査と言います、もちろん現物をじっくりと観察することは不可欠なのですが、現地調査での限られた時間では焦ってしまい気付かなかったことを、

<sup>3</sup> [https://kotenseki.nijl.ac.jp/page/manual\\_20171027.pdf](https://kotenseki.nijl.ac.jp/page/manual_20171027.pdf)

冷静に振り返ることができるのです。また、通常では、別の機関に所蔵されている書物を並べて見るのが難しいのですが、デジタルの画面上でなら可能、しかも自由に拡大して観察することまでできるのです。これはありがたい情報です！



（左のビューアーは国文研蔵本、右のビューアーは筑波大学附属図書館蔵本）

2019年12月13日（金）

さらに、人文学オープンデータ共同利用センターが公開している「顔貌コレクション（顔コレ）」<sup>4</sup>（さまざまな資料に描かれている人の顔をアーカイブしたデータベースで、大量に見たり比較したりすることで、どんな風に顔が描かれてきたかを追ってゆける）や、絵画の豊富なアーカイブを見ることができる海外のデータベースなども紹介していただき、おふたりのみならず、入口先生やダヴァン先生、古典インタプリタにとっても新しい情報が満載、充実の時間となりました。



### 3, デジタルアーカイブ活用のこれから

ところで、こういった便利なデータベースは、今後どのような場面で活用されてゆくのでしょうか。



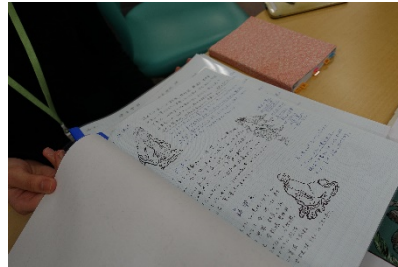
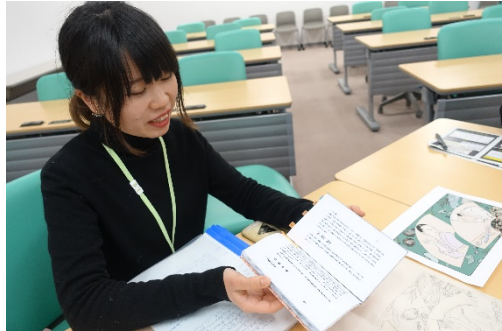
この日松平さんは、ご自身で書きためておられる、画論や絵手本の写しを持ってきてくださっていました。

従来の日本画学習では、和漢の画論を学んだり、絵手本を何度も模写したりすること——つまり、古から決まっている型を学習することが重要視されていましたが、現代の美術学校では独自性の方が

<sup>4</sup> <http://codh.rois.ac.jp/face/>

2019年12月13日（金）

重視される傾向にあるため、却って迷いが生じてしまうことがある  
そうで、自主的に古い書物から学ぶよう努めているのだそうです。



しかし昔の書物はなかなか手に入らないこともあり、自由に摸写  
することも難しいのだそう。そこで、データベースにあがっている  
絵手本や画論の古典籍を大いに活用したい、と思ったそう。確かに、  
原本を横において摸写したり、メモしたりするのは、なかなか気軽  
にはできませんが、デジタル上のものであれば拡大して観察したり、  
自由にコピーして切り貼りすることも可能です。

データベースにアクセスし、使いこなせるようになりたい、と嬉  
しそうに語っていただきました。

梁さんも、『百鬼夜行図』をモチーフにした作品を制作された際に、  
日本ではどのように妖怪の顔を描いてきたのかを知るために、  
Google 画像検索を活用したそうなのですが、こういったデータベー  
スを活用することで、さらに大量の画像を収集することができそう

です、とのこと。



一方で先生方も、デジタルヒューマニティーズを、ご自身の学問  
のなかでどのように捉えてゆくのかについて、お考えを語ってくだ  
さいました。

「データベースだからこそ、ますます書物が生きようになりま  
すね」とおっしゃったのは、ダヴァン先生。

国文研が進めている、古典籍をデジタルアーカイブ化してデータ  
ベースで公開してゆくという事業は、「現物は見られないからデジタ  
ルで我慢しなさい」ということではなく、対現物ではできないこと  
——摸写したり、切り貼りしたり、比較したりすること——を可能  
にする進歩なのだとお考えになったそうです。

また、入口先生は、バーチャルな世界と人間の身体との関係性に  
興味を抱かれました。

2019年12月13日（金）

絵手本とは、誰かの肉体で描いた線描を書物に「冷凍」したもので、それを摸写すること——自分の肉体とリンクさせること——は、その肉体性を「解凍」することだ、という松平さんの発言があったのですが、書物をさらにデジタルのなかで冷凍することで、「冷凍」の層がいくつにも重なります。それを肉体で解凍したときに、どう親和性があるのだろうか、あるいはどう反発するのだろうか、もしかすると、最初の肉体性が際立つのではないだろうか……そんなことを想像されたそうです。



そして、新 DB のプロジェクトに長く関わっておられる山本先生は、研究者以外のユーザーの興味のあり方や、ニーズについて知ることができてよかった、古いものからインスピレーションを得るツールとして、デジタルアーカイブを有効利用して欲しい、というコメントを。

ワークショップを通じて、データベースの便利さについて学べただけでなく、さまざまな立場から、デジタル技術と自分たちの営みについて考えることができました。

